

# 無言の示言

鍵 主 良 敬

はじめに

この四月から、二回生になられた皆さん方が、新しく仏教学会の会員になっていただけただけのことです、その歓迎の会が毎年開かれていることです。私は、たまたま今年度、学会長という役目を務める順番になったものですから、皆さんに対して歓迎の話をすることになりました。皆さんは既に昨年一年間、仏教学というものを学ばれたわけですが、そういう意味では、学会員になることも、本来ならば一回生からでもいいのではないかと、という意見もあるのですが、長年二回生から、会員になってもらうという慣例があるものですから、このような形が継承されていることです。従いまして、昨年一年間、仏教学というものに触れて、専門の授業を受けたわけですから、二回生になって学会員になるということが、それほどびびくりすることにあたるのかどうか、このあとで皆さんの歓迎の会が開かれることですから聞いてみたい気がします。一年間、仏教学を学んでみてどんな感じをもたれたでしょうか。仏教というものは、大変難しいものだというような感じが強いのか、なかなかおもしろいという面もあるのか、そのへんのことを何かまとめなければならぬということだそうでありますから、最初に書いてくださっても結構じゃないかと思えます。いずれにしても、今年度から皆さんは本格的に仏教学の勉強を始めるということで、「おめでとうございます」という

ことを申し上げたいわけです。

私も長い間、仏教学を学んできました。それで、はじめてこの大学に入った頃の自分の状態というものを思い返してみながら、皆さんがこれから仏教を学んでいくための参考になることをお話できればいいのであろうかと思っております。私にとって、仏教学というものは非常におもしろいといえばおもしろいのですけれども、おもしろいというよりは、奥深いと言ったらいんでしょうか。底知れないと言ったらいんでしょうか。そうした感覚が、今でも率直にあります。しかし、ただ単に、奥深いとか、計り知れないとかということだけでは、皆さんに手がかりを掴んでいただくことも困難であろうかと思えます。底知れないけれどもおもしろいということが、本当に私自身に感じ取れないければ、皆さんに仏教学のおもしろさということも解っていただけないのは当然のことであろうと思えます。ですから、私は、どのようなおもしろさを、仏教学に感じ取ってきたかという問題をお話ししたいと思います。

そこで、題を出さなければならぬということでしたので、「無言の示言」という講題を出しました。この「無言の示言」という言葉を見ただけでは、皆さんは何を言っているんだろう、何が言いたいんだろうと感じられるのではないかと思います。そう思ってくださいれば、大変うれしいと言ってもいいわけなのです。しかし、こういう題を出した私としては、奇妙だなという感じを持ってしまわれて、そんなややこしいものならもうやめたということになってしまうと、甚だ残念です。私が学んできた仏教というものは、ある意味では、逃げ出したくなってしまうような事柄も含まれていないわけではないのですね。そして、いつまでたってもその正体を掴むことは難しいとも思います。私にはまもなく定年で、大学で皆さんと一緒に学ぶとか、いろんな疑問を解きほぐしていくという場からは離れます。けれども、やはり自分自身の生涯の課題というか、問題は尽きないということを思います。そういう点では、定年知らずという問題を仏教学というものから教えられたと言ってもいいかとも思うわけです。

それで、最初に、講題に出してあります「無言」ということは、言うまでもなく、言葉がないということなのです。言

葉では表わすことができないということですね。そして、その言葉で表わされないものが、言葉で表わされているということが「示言」という言葉の意味になるわけです。誰が、どういうところでのこの言葉を用いているかといえますと、唐の時代の中国の人ですけれども、賢首大師法蔵（六四三―七二二）という人です。私は仏教学のなかでも、「華嚴学」という学問を中心に学んできました。それは『華嚴経』というお経を拠りどころとした学問です。その学問を完成した人が法蔵という人です。『華嚴経』の持っている深く、計り知れない意味を探り出そうとして、『華嚴経探玄記』という書物を書きました。「玄」という文字には、黒々としているというような意味があります。水の溜まっている、淵ですね。深く水が溜まっていますと色が黒ずんで見えます。「幽玄」というような言葉もありますけれども、奥深いものということですね。その奥深いものというのは、言葉では表わしにくいというような意味合いのことになるわけです。そして、『華嚴経』という經典は、お釈迦さま、つまり仏陀が悟りを得たその内容を説いている經典です。

仏陀が悟りを得たということは、私たちがこの世に人間として生きているそのことのなかに、どうにもならないような、問題を抱え込んで投げ出されていると言ったらいいのでしょうか。その問題を根底から解決したということですね。皆さんは、一回生のときにその辺のことを既に学んでこられたのであろうと思いますので省略しますが、要するに自分が抱え込んでしまった人間としての問題、どうしていいかわからないような問題を解決したということです。仏陀ということは、目を覚ました者ということであり、人生の謎が解けた人ということですね。それが悟りの内容ですから、そういった答えが見いだされたことは道が成り立ったということでもあります。「成仏」ということは、「成道」とも言いますから、道が見つかったということですね。その内容を、華で飾る。それは華が開いたことにもなるので『華嚴経』と言うのです。

『華嚴経』とは、そういう性格のお経なんです。そして更に、仏陀が悟りを得た二週間目の心の状態を言葉で表わ

したものだということです。二週間目ですから、まだ言葉になっていない。つまり「無言」ですね。言葉で表わしようがない。しかし、真理を発見されたことは確かです。自分を脅かしていたさまざまな問題、そういうものは解決した。従ってこれで生きていける。これで死んでいけるというか、そのような状態を無理に言葉で表わしたものが、『華嚴経』という經典であるということです。私は、その經典が好きで学んだわけじゃないのですけれど、たまたま間違つて、そういうお経に縁をもつてしまったと言つていいかもしれません。その『華嚴経』の奥深いところ、言葉で表わしにくいところを探り出そうという、法蔵の『探玄記』の始めのところに「無言の示言」という言葉があるので。原文を参考までに挙げますと次のように言われています。

是に於いて、無像にして像を現すること、なお暘谷の太陽に昇らるるがごとく、  
無言にして言を示すこと滄波の巨壑を傾くるがごとし。

おおよその意味は、形のないところから形像を現すのは太陽が昇るようなものであるし、言葉のないところから言葉で示すのは大海に大波が涌き立つようなものだ、ということですから。言葉では表わせないようなものを言葉で表わす。「無言の示言」という言い方で問題を提起している。この問題が私自身には生涯を貫いて、どうということなんだろうかと課題になったわけです。それは今も大きな課題となつていて、大乘仏教というか、あるいは根本仏教と言つてもいいと思うのですが、仏陀がわれわれに教えてくれている人生の問題、人間の課題を解きほぐす場、重要な手がかりが示されているに違いないと、ずいぶん昔から考えていたような気がします。そこで最後の機会として仏教学の奥深さ、おもしろさ、というようなことを感じ取っていただければ大変うれしいことです。そして、そのための手がかりの一部分でも、皆さんにお話しできて、責任の一端を果たすことができれば有難いと思うわけなんです。

そういうことを含めまして、言葉で表わせないと言うのですから、非常に難しい問題がそこに含まれているということとは止むを得ないと思うのですが、しかしそのことをも言葉で表わされなければならないというか、そこにわれわ

れが仏教学を学んでいくかぎりには困難な問題があるわけです。

### 一、初転法輪の意味

お経にしろ、論にしろ、それらはすべて言葉です。しかも私の場合には中国仏教を専門に学んできましたので、インドで生まれた仏教が中国人に理解されたといいますか、漢訳されて中国の言葉で、仏教の真髄というか、いのちのようなのが伝えられた、ということは大変意味深いことであつたと思うのです。そういったことをあらためて現在も噛み締めています。これは皆さん方が別に仏教というように限らなくても、日常生活のなかで、自分自身にとって本当に大切なことというか、伝えたいことと言つてもいいかも知れませんが、そういう問題であればあるほど伝えにくい。あるいは言葉にならないという問題に出会うことがあるのではないかと思ひます。

もう二十年ほど前になるんですが、私は、学生諸君の世話をする役といひましようか、そういったことを二年ほど担当したことがあるんです。そのときに、たまたま哲学科に在席していた女子学生が、二回生になりました。今時分に、マンシヨンの八階から飛び降りて自殺してしまつたということがあります。それで私は役職上、お通夜葬儀と弔問に伺つたんです。ところが、その学生のお母さんは、顔面は蒼白でも涙は流していません。悲しいといつても、悲しいという言葉で表わしようがないというか、まさに無言です。言葉になりようがないと言つてしようか。ショックがきつすぎて、ただボーッとしておられた。その姿を拝見した時に、私も弔問に伺つただけけれども、お慰めする言葉がなかつたです。「一切の無言」という言葉を既に学んでいたということはありましたが、涙が出るのか、悲しいという言葉で表現できるとかということは、かなり余裕が出来てからのことであつて、悲しさそのものとか、本当に悲しいときには、悲しいという言葉にはならないということを、その時に本当に感じました。そして、眞実な言葉で表わしようがないということをしみじみ思いながら、しかし黙っているわけにもいかず、何か口

のなかで言葉にならない言葉で弔慰を述べていました。そして次の日、葬儀のお経がすみまして、いよいよ棺（ひつぎ）がマンションから外に運び出されようとしたその時に、今まで黙っていたというのか、まったく言葉を失っていたそのお母さんが、突然亡くなった娘の名前を叫んだのです。お話ししながらその声は今も私には蘇ってくるのですが、申し訳ないけれど、その子の名字は忘れてしまいました。しかし、お母さんが「まこちゃん！帰ってきて！」と絶叫したその声を忘れることはできない。そして、棺に取りすがって、外に持ち出されることを必死で止めようとしたんです。親族の人達がびつくりして慌てて棺から無理やり引き離した。もうすっかり昔のことですが、そのときの思いもかけない光景を思い出しながら、言葉では表わせないことはどんなにしても表わせないけれども、しかし単にそれだけで済むものではないのであって、そのことが何らかの表現を取るといふ事を考えているわけです。

こうしたことが、お釈迦さまといいますが、仏陀が、『華嚴經』という經典で表わされているといふ事なのかなと思います。沈黙そのものは一週間目ということですが、二週間目ということになりますと、多少何かご自身の心のうちに蠢くものがあつたとも言えるのでしょうか。だからといって、それは決して言葉になるものではない。その点で言葉を否定されてしまうわけですが、そのような状態のなかで、仏陀は、自分の悟つたこと、見いだしたものは、話しても間違われると思われたといふのです。なぜなら、人々はみんなあらぬ方向を見ているからです。とんでもない誤解のなかでしか受けとめてくれない。話せば話すほど間違われると思われたのです。だから話すのはやめる、説法はやめると考えられたと伝えられている。その時に、ブラフマン（梵天）という神々の神が、「そうじゃない、あなたの今考えていられるそういう気持ちも解るけれど、ひよつとすると解る人もいるかもしれない。だから、あなたの見いだした真理は、人間として生きていくその道の確立なのだから、なんとか話してもらいたい」と勧めたといふんです。これは、有名な伝説ですから、一回生の時にたぶん聴いてこられたんじゃないかと思えます。私は学生時代にその話を聴きました。三度（みたび）お願いしたと言ふんです。これは『法華經』という經典のなかにも、ある

いはまた『華嚴經』の「十地品」という章のなかにもこのような意味合いのことが述べられています。そしてようやく三度目に、間違われるかもしれないけれども、自分自身の見いだしたものを話そうということで、「耳あるものは聴け、目あるものは見よ、甘露の門は開かれた」と言つて初めて説法されたということです。『南伝大蔵經』では

耳ある者に甘露の門は開かれぬ 己が信執を捨てて清き耳を持て

梵天よ、予は害あらんを慮りてぞ 正妙の法を人間に説かざりける

となつています。「甘露」というのは、私たちの身も心も潤される、みずみずしく、若々しいのちの糧のようなものなのです。また「不死」ともいう。決して滅びることのないもの、その門が開かれたということです。そういう点で、ゴータマの見いだした仏教学の真髄と言つてはいかがでしょうか、何に気が付いたのかと言いますと、それはダルマですね。真理・真実という言葉で聴いておられるかと思ひます。真実そのものが、生とか死とかという問題を徹底的に打ち破る力を持つていると言つたらいいのでしょうか。生とか死という問題を乗り越えることの出来るような意味での「不死の門」と言えばいいのでしょうか。そして、それに触れることによつて、われわれが生きる勇気を与えられるのであります。人生には本当に煩わしいというか、いろんな問題のなかで悪戦苦闘しなければならぬということがあるわけです。そのことは、ゴータマ自身が王宮生活のなかで七転八倒の苦しみを味わつたことでしょう。だからこそ、妻を棄てて子を棄てて王国を棄て六年間の苦行をなされたわけです。そして遂に、仏陀としての自覚に達せられた。そのような苦心惨憺の末に見いだしたダルマそのものは、話せば話すほど誤解を招くもの、間違えられるものだ。だから、話しても無駄だという、そういう意味での「無言」ということがあつたわけです。

言葉に対する断念と言つたらいいのでしょうか。言葉で通じるような簡単なものではないということですね。つまり、皆さん方が本格的に仏教学を始めていただくというところをお願いしたいわけですが、それは最終的には言葉を手がかりにするしかないんです。それしかないのだけれども、しかし、言葉では表わされないという問題をよく考え

て欲しいのです。こういう問題について私自身も考えたことがあるんですけども、「如」というか、「真如」でもいいです。「真にそのようにあるもの」ということですね。悲しさは悲しさそのものとして言葉で表わせない。しかし、それはまさにあまりにも現にありすぎてと言うか、まさにそのままとしてそれはあるとしか言いようがない。現に確かな手応えというのか、疑いような内容としてある。しかしそれが言葉にならないという意味で「無言」なのであって、単なる無言ではないということを、身近なこととして感じて欲しいと思うのです。しかもそのことは、それだけで済むものではありません。仏陀のことを「如来」とも言いますが、「来る」というのは、言葉の世界に来ると言ったらいいでしょう。現実には私たちがの世界は言葉しか手がかりになりません。われわれの現実、つまり人間というものは言葉を使う動物であり、言葉でものを考えるものです。だから、難しい専門用語もこれらほとんどん学んでいかなければならないかもしれません。そして、言葉を知れば知るほど、その言葉の内容というものが深みを持つてくると言います。人生に豊かさをもたらすという意味で、言葉を学ばなければならぬと思います。専門用語で聴きづらいかもしれないし、考えにくいかもしれませんが、そのような言葉に対するその洗練された感覚というものを、養っていかなければならないのだらうと思います。これは自分のことは棚に上げて、皆さんにお願いしたいと思つてゐることなのです。

## 二、文学部での学び

言葉というものは本当に大切なものです。私たちは文学部という大枠のなかで、そのような言葉の大切さというものをいつも念頭におきながら、仏教学を学んでいるわけです。文学という限りは、言葉、あるいは文章と言えたいのでしょうか。そういう学問を言うのでしょうか。その点で私は、自分の一回生、二回生の頃を思い出します。大谷大学に入って、一回生の時に龍樹とか世親という言葉を聞きました。この人達の名前について皆さんはもう耳にして



おられるでしょう。仏陀が明らかにされたという真実そのもの、人間にとつての拠り所となる真実そのものを、インドの大乗仏教として表現し直した方々です。それを目指すことによつて、われわれの人生そのものが本当に豊かなものとなつていく。びくびく逃げ回つて人の顔色ばかり伺つて、ちつとも自分自身に自信が持てないというそんな人生ではなしに、まさに「唯我独尊」と言えるような世界を発見する。そのことを私たちに教えてくれた方々であると言つていいと思います。でも現在では「唯我独尊」という言葉は変な意味に使われていて誠に残念です。

「独尊」は独断ではない。本当に自分自身の足で立てること。自分の人生に責任をもつこと。自分自身の考え方によつて生きる。そのような歩みが成り立つ道を私たちに与えてくれた人として、まず「仏陀」がおられるわけです。そしてそれを大乗仏教として蘇らせてくれた人が、龍樹とか世親という人ですね。その教えは、空観とか唯識と言われています。仏教学とは、それまで私の考えていた仏教とは全然違うんだということを、振り返つてみると、入学したの頃感じさせられたように思います。ただし、そのいのちでも言つていいものが、言葉を超えているというような考え方はよく解らなかつた。どうしても言葉で表わせない、というような意味合い、特に「あらゆるものは空である」なんていうのは、何もないと言うに等しいようにしか受け取れませんでした。そんな掴み所のないものを、どうやつて解ればいいのか。そういうことをまず一回生の頃に強く思いました。

今では、多少解っているつもりだけれども、一回生の時に感じたことは、人生には何も無い、だから掴むな、何も掴むな、そんなことを言われたつて、どうしようもないじゃないかということです。もう少しいえば、何もなく自分さえもない「無我の我」が「独尊する我」であるなどというのは、まったく解らなかつた。しかしそこに何か、これは大変なことを言っているんだなあということが、幼心にとつてか、素人の直感として感ずることができたように思います。何と言えいいのか、知識の量は四十年以上も学んできたのですから、今では多少のことは知つています。しかし、そんなことをはるかに超えて、一人の人間としての「唯我独尊」という、かけがえない誰にも変わ

つてもらえない、私自身に係わるような問題は、すべての人にとってゆるがせにできないことなのだろうと思います。ところが同時に、人間にはそれを妨げるようなさまざまな障害があります。いわば無明と言われているものなんです。目が眩まされる。騙される、誤魔化されて本当のことが見えないという問題があります。

そういったものを打ち破るようなはたらきをするものが「空ずる」ということなのだと思います。これについては、いろいろな捉え方がありますから、おもしろいと思つたらこれから勉強して下さいと思います。だから、一回生、二回生であろうと、皆さんはもう直感的には仏教学を解っているんじゃないかと思うわけです。たまたま仏教学に縁を持たれたということは、騙されているような状態を破るものとしての、何か大事なものを、仏教という言葉では感じてはおられないかもしれないが、直感的には既に持っていると思つていいと思います。それは私も、一回生・二回生の時に、ちょっと感じ取れたような気がするんですね。だから、もしも皆さんが今まで考えてきた仏教というものと、少し本気でやりだした場合の仏教とは、ちょっと違うぞと自分で感じて下されば、それはそれだけで既に大変なことであると思います。感じ方は人によっていろいろあつていいと思うんですけど、もしそういつたことを感じられたならば、それを大切にしてくれたい。

今感じ取っているそのことは、皆さん自身の純粹感覚とでもいうのでしょうか、仏教学の専門用語としていえば、プラジュニヤー、「智慧」ですから何十年たつても決して色あせないことだと思います。龍樹に言わせれば、それは決して「知識」・ヴィジュニヤーじゃないですね。「識に依らずに智に依れ」と仏陀が最後の遺誡でわれわれに残されたように、智慧というような知り方は本来内面的なものです。「教育」は「耕す」という言葉に関連していると言われますが、耕すということはその世にわれわれが命を賜つたということに付随して感じ取られていくような純粹感覚とでもいうべきことにかかわることでしょう。それを成長させるということであつて、もともとないものは耕せません。ですから、皆さんが改めてちょっと違うぞというようない見直しをして下さればということをお

願ひするのは、そのような意味です。自分自身にたいして自信をもってもらいたいし、私は何十年たつても同じことを感じていますよということをあえて言いたいです。本来的な感覚と言つたらいいんでしょうか、入学したてのときに私は、そういった仏教学そのものを持つているおもしろさということを最初に感じました。

それと同時に、ある英語の先生から授業中に聞いた話が今でも忘れられません。まさに言葉がないとか、それを言葉で示すとかです。そういう言葉というもののもつていて大切さですね。つまり、文学ということのもつていて大切さともいえる。大谷大学は文学部の大学だということを、英語の先生に教えられた覚えが今も忘れられないんです。

何人か英語の先生はいましたが、いま申し上げようと思つてゐる先生は、一番恐ろしい人でした。授業中に「文学部の学生がこんなテキストが読めなくてどうするんだ!」といつて学生をどやしつけて、がんがん絞るんです。必死になつて勉強していくんですが歯が立たない。そのときつくづく思ひました。字引は引かなければいけないけれども、字引を引けば訳せるというものでもない。そういうことを身に染みて思ひ知らされました。字引に書いてあるような説明というのは、本当にその通りなんだけれども、その一部分でしかないというんでしょうか。よちよち歩きのような、意味だけが雑把にならとれるというような程度の予習で授業にでると、先生はそれは本物ではないという眼差しで学生の訳を訂正するわけです。まあ、厳しい愛情なんですけれど、叱咤激励しながら授業を進めていく。そのようにして先生が訳してくれる日本語に対して、まさに心が吸い寄せられるように、ご馳走を目の前にして涎を垂らすようにというか、引き込まれていつたわけです。一流の英文学者で何冊も本を翻訳したりしてゐた先生が、たまたま一回生の時の英語を教えてくれたんです。そのとき私は、どうしてこんな見事な訳が出来るのかと心底から思ひました。それで下宿に帰ると、次のところを字引と首つ引きで訳していくわけです。叱られるから尚更なんだけれども、一行か二行ぐらいはなんとか先生の訳した日本語に則つて多少とも文章らしくなるんですが、三行目、四行目になると何とも言えないもたもたした日本語の羅列になつて、先生の訳には及びもつかない訳になつてしまふ。意味としてはそ

んなものなんでしょうが、先生の訳を聴くとほれほれする。そんなことを何度も繰り返すわけです。ただ、叱られるから恐ろしいということもありましたが、それよりも先生の訳文の見事さに心を奪われたような感じで、一生懸命あまりさばらないで、多少ガリベンの勉強していた。

そんなことを続けていたある時、ちょうど今頃だったかと思いますが、その先生が突然授業をやめまして、佐藤春夫という詩人の「秋刀魚の歌」という詩を、その詩の背景とともに、紹介してくれた。佐藤春夫という詩人は、皆さんにはあまりなじみのない人かもしれませんが、「秋刀魚」というのは、当時は安物の秋の魚のことです。その「秋刀魚の歌」という詩について一時間つぶして話してくれた。われわれは内心ホットしたというのが正直なところだったのですが、その内容からは非常に鮮明な印象を受けました。つまり、谷崎潤一郎と佐藤春夫という詩人の関係です。その先生が旧制の高等学校時代の頃の話だったように思いますので、西暦で言うところは一九二〇から三〇年前後の頃、つまり大正の末期から昭和の始め頃の話です。そんな古い話は皆さんにとってはあまり興味がないのかもしれませんが、いまでは当たり前というか、別にびつくりする話でもないんですが、谷崎潤一郎が自分の奥さんの妹さんに手を出して、つまり不倫ですね、そこへ佐藤春夫が入り込んでいたんですが、その潤一郎の奥さんにすっかり同情して、好きになってしまったわけです。そこで奥さんが、子供もいたんですが、子供を連れて佐藤春夫のところへ逃げて行くんです。谷崎潤一郎から見れば逃げられたんだけれども、逃げられてみると釣り逃がした魚は大きく見えるということでしょうか、取りかえしたくなるのでしょうか、二人は大喧嘩になってしまふ。昔は姦通罪などという罪もありましたから、今日週刊誌をにぎわしているようなそんな話とは時代が違います。そんなことで、大騒動ということになったらしいのです。谷崎潤一郎の子供を連れて逃げてきた奥さん、谷崎千代子という人ですが、その人が佐藤春夫のところへ逃げてきたのを、潤一郎が無理やり連れ返したそのときの何ともいえない自分の悲しさというか、人生の辛さというか、言葉にならないような辛さを、秋刀魚という二足三文の安物の魚に託して歌ったのです。

秋刀魚は鯛でも比目魚でもありません。しかも、不倫をしたとかしなないとかという泥々した人間の闇の部分を詠った詩だと言っている。その英語の先生が言おうとしたのは、「君等、ポエムが解らないと駄目だよ」というんでしょうか。言葉というのは、まさに魂だっているんでしょうか。そしてその「言葉の魂というものはポエムに表わされているものなんだよ」というんでしょうか。

このような問題になりますと、私は鳩摩羅什のことを思わずにはいられません。鳩摩羅什という大翻訳家は、五世紀の始め頃中国へ来ました。この人の翻訳のおかげです。私たちは、今もお恩恵をこうもっているそういう人です。翻訳家というと玄奘三蔵のことも忘れてはなりません。皆さんの学生手帳に書かれている大学歌の二番に歌われている人です。鳩摩羅什は、大谷大学の大学歌には登場しませんけれども、皆さんの手帳に書かれている『仏説阿弥陀經』というお経の訳者として、われわれは今もお世話になっていると言いうことができます。その鳩摩羅什という翻訳家が、サンスクリットの持っている命を中国語に翻訳する。そしてそれによって、仏教の真髄そのもの、つまり「空」とか「真如」と言われるような、なにか言葉では表わせない、その表わしにくいものを見事に伝えたと言うことができます。そうした翻訳事業を成り立たせた鳩摩羅什が、サンスクリットには言葉のリズムというものがああり、魂というものがこもっているのです、それを単に漢訳するだけならば、おおよその意味を伝えることはできるけれども、命までは伝えることができない。だから、単に意味を伝えればいいというようなことではないのであって、言葉の命というか、あやというか、言葉や文章のあや、あるいはつやというのか、ふくみというのか、難しいところだけれども、そういう言葉の命や魂、まさに言霊ですね、それをこそ伝えなければならぬ。そのもつとも大事なものを伝え損なうと、ちょうど人の噛んだ後の飯をむりやり食べさせられるようなもので、いたずらに味を失うばかりではなしに、却って吐き気をもよおすといっている。そういう記録が残っています。さすがに超一流の翻訳家は言うことがすごいですね。

その人の翻訳した経典は、『法華経』でも『維摩経』でも龍樹の「空」というような問題をもののみごとに伝えてくれている。そのおかげで、われわれはかろうじて仏陀が残してくれた、われわれ自身の大切な拠りどころをほんの少しでも感じる事が出来るわけです。そういう点で、鳩摩羅什もリズムが大事だとか、歌が大事だとか、大切なことを伝えようとしているのです。こうしたことは、わが国ならば、和讃というような讃歌のことになるのであろうと思います。お経のなかにも、偈頌と言われますものが頻繁にでています。散文で表わされている部分と、それを歌でまとめてある部分とでお経は成り立っています。そのように、リズムというか、魂というか、命のようなものを伝えたいんだということで、同じように詩で表わされるのです。ポエムで表現することが非常に大切な意味を持つている、ということをお願いしたいのだろうと思うんです。

英語の先生が教えてくれた文学の魂は仏教の命のようなものとも共通する。鳩摩羅什のお弟子方の秀才連中が残してくれた文章を読んでもそのことを感じますし、私が一生涯離れることが出来ないというか、つきあわざるを得なくなつた賢首法蔵という人の『探玄記』の中にも読み取れるのです。言葉にならないものを言葉で「示すことを」「無言の示言」と言う。こういう言葉の背景には、あえて言葉で表わされることによつて、言葉の命がリズムをとって伝わつてくると言つたらいいのでしょうか。そんなことを私は感じるので。そういう点で、その英語の先生が、できの悪いわれわれ学生に、自分自身の青春時代の思い出を込めながら、大事なことを教えてくれた。まったく詩にはなりにくい、というほかないような、秋刀魚だとか、男と女の不倫の問題だとか、裏切つたとか、傷つけたとか、罵りあうといった背景をもちながら歌つた詩にふれて、何ともいえない不思議な感銘を受けました。国文学の授業でもないのに、英語の先生からそんな話をお聞きしたわけです。率直に言つて一時間儲かつてほつとしたというような感じも確かですが、しかし単にそれだけのことはなかった。青春の真つ只中にいながら、その意味がよく解つていないわれわれに、単なる道徳を超えた素晴らしいものを伝えてくれた。泥々した汚れの中から、美しい蓮華が咲くような見事

なポエムというものが大切なのだということ。それは普遍的な輝きをもつて何十年経つても忘れられない想い出として、私の脳裡に焼きついています。「秋刀魚の歌」をとうとうと読んでくれた先生を偲びながらその詩を読んでみます。

あはれ

秋かぜよ

情（こころ）あらば伝へてよ

——男ありて

夕餉（ゆふげ）に ひとり

さんまを食らひて

思いにふける と。

さんま、さんま、

そが上に青き蜜柑の酸（す）をしたたらせて

さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。

そのならひをあやしみなつかしみて 女は

いくたびか青き蜜柑をもぎ来て夕餉にむかひけむ。

あはれ、人に棄てられんとする人妻と

妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、

愛うすき父を有（も）ちし女の児は

小さき箸をあやつりなやみつつ

父ならぬ男にさんまの腸（わた）をくれむと言ふにあらずや。

あはれ

秋かぜよ

汝（なれ）こそは見つらめ

世のつねならぬかの団欒（まどい）を。

いかに

秋かぜよ

いとせせめて證（あかし）せよ、

かのひとときの団欒ゆめに非ずと。

あはれ

秋かぜよ

情あらば伝へてよ、

夫に去られざりし妻と

父を失はざりし幼児（をさなご）とに

伝へてよ



——男ありて

夕餉に ひとり

さんまを食らひて

涙をながす と。

さんま、さんま、

さんま苦（にが）いか塩っぱいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。

あはれ

げにそは問はまほしくをかし。

秋刀魚の歌——『春夫詩鈔』（岩波文庫版）

英語の先生は、もつと名調子でこの詩をわれわれに吟んでくれました。四十数年前を思い出しまして、ある感慨をもよおすんです。ちようど今頃でしたから春の最中なのに、秋の歌、「秋の心を君たちは学ばないといけないよ」というようなことですね。そして、泥々したものとしようか、男と女のそうした問題、目を背けたくなるような問題は、まだあまりよく知らなかった頃の筈ですけど、その哀れさというか、人間の悲しさというものは感じ取れた。そして、およそ詩の素材にはならないようなものを、見事な詩に詠うことの出来るような悲しみの深さというのか、人生の辛さというのか、そういったものが多少わかったのです。言葉にならない呟きのようなものを、奥深い

ところにひそめながら、それを言葉で表現することは可能なのだと思つたのです。

そして論とか経を伝えてくれた超一流の翻訳家のご苦労ということも感じます。それは、言葉を使いながら、その言葉にとらわれるのではなしに、言葉を生み出してくるような世界を伝えようとしている。まさに、月をさす指ですね。指がないと月を見ることはできない。しかしその指によつて、月を見失うということもありうるのですね。そういった矛盾した関係のなかで、われわれは本当のもの、自分が一番求めているものを目指さざるをえないのです。そのためには、やはり本当に洗練された言葉というんでしょうか、そういう言葉に対する憧れを持つということが必要であるように思います。自分の求める心、願いが大切だということでしょうか。そして、その願いが深ければ深いほど、洗練されたものを多少とも与えられる可能性は多いということです。

## おわりに

そんなこともあつて、私は詩、ポエムが好きです。詩によつてなるほどそうかという領きを得ることが多い。それにしても私自身はなかなかいい文章が書けないので、本当に我ながら情けない。しかし言葉のもつている大切さということは、みなさんも仏教学を学んでいくときに必要な事柄です。言葉があるから、その言葉だけをみればいいというのではなしに、その言葉に表わされている言葉を超えた本当のもの、尽きせぬ想いを感じとつていくような感性を養わなければなりません。それは、単なるいやらしさを超えて、汚れを感じさせないような美しいものを秋刀魚に託してさえも表現できるということです。また、これはたまたま出会つた詩なのですが、言葉にならない沈黙を言葉で表わす、それが文学の命だということを詠っていて、仏教学の大切な魂にも関わるものとして、同じことになるのかと思つて紹介します。感銘を受けたポエムで、谷川俊太郎という詩人の詩です。あるいは高校時代の教科書にもつていたのではないかと思います。最後に、その詩を読んで、私の話のしめくりに使いたいと思います。「もし言葉

が」という詩なんです。

もし言葉が

谷川俊太郎

黙っていた方がいいのだ

もし言葉が

一つの小石の沈黙を

忘れている位なら

その沈黙の

友情と敵意とを

慣れた舌で

ごたまぜにする位なら

黙っていた方がいいのだ

一つの言葉の中に

戦いを見ぬ位なら

祭りとそして

死を聞かぬ位なら

黙っていた方がいいのだ

もし言葉が

言葉を超えたものに

自らを捧げぬ位なら

常により深い静けさのために

歌おうとせぬ位なら

『谷川俊太郎詩集』（角川文庫版）

この詩の解説は必要がないと思いますので、各自で味読して下さい。最後に、鳩摩羅什の愛弟子の僧肇という人の

幽関は啓き難ければ、聖の応ずることは同じからず。

本に非ざれば以って跡を垂れること無く、

跡に非ざれば、以って本を顕すこと無し。

一本と跡と殊なりと雖も而も不思議に一なり。

という『維摩経序』の文章を踏まえて『探玄記』は、次のような文章を残してくれています。

是において、機縁の感ずることに異なりあるをもって、

聖の応ずることは所以に殊分す。

聖の応ずることは殊ると雖も

不思議に一なりと知るなり。

人それぞれによって感じ方は異なるでしょうから、言葉を超えたものを伝えようとする達人の応じ方にも差があるのは当然でしょう。しかし、奥深い幽関と言われるようなものを踏まえてこそ、それは巧みな言葉となり、そのような言葉に出会わなければ、われわれも本源的なものを感じ得ることはできない。また、言葉を超えたものとその言葉とは別であるけれども、不思議なことに「一」だということです。

私の責任の時間は、以上で終わらせていただきます。感想が書きにくいということでしたら、その通りに書いてくだされば立派な感想になると思います。それぞれの担任の先生方が読んだ後で、私も拝見して自分自身の仏教学というものをより深めてみたいと思っております。以上をもちまして、皆様に対する私の歓迎の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。